日本語の日常会話における言い直し表現の検討

吉田　奈央[1]　丸山　岳彦[1]
[1] 専修大学
nao.yoshida.sensyu@gmail.com　maruyama@isc.senshu-u.ac.jp

概要

本稿では、日常会話の中に現れる「言い直し表現」（self-repair）に着目し、その特徴について議論を行う。会話は参与者同士のインタラクションの影響を受けながら動的に構成されていくものであり、一人の話者がインタラクションの影響を受けずに発話し続ける独話とは、発話様式としての性質が大きく異なる。我々はすでに独話における言い直し表現をモデル化しているが、このモデルを会話に適用するにはどのような拡張が必要か検討する必要がある。よって本稿では『日本語日常会話コーパス』（CEJC）に含まれる日常会話のデータを観察し、独話では見られなかった言い直しのタイプの例を調査及び分析することでその枠組みについて検討する。

1　はじめに

発話産出という言語行動の過程において、流暢な発話産出が何らかの要因で阻害された場合、ある種のトラブルが発生する。沈黙、語断片、発話の中断、語の選択誤りなどがその例である。さらに、これらのトラブルの発生を検知した話し手は、発生した（発生しそうな）トラブルに対し、即座に何らかの言語的方略を用いて対処する。フィラー、延伸、言い直し、追加、挿入などがその例である。ここでは「発話産出過程のある段階が何らかの要因で阻害されることにより発生する言語現象、および、それを修復するための行為として発生する言語現象」を「非流暢性」と定義する。

筆者らはこれまで、非流暢性のうち「言い直し」を取り上げ、その構造を捉えるためのモデルを提案してきた [1, 2, 3]。しかし、これまでの研究は『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）に含まれる独話を対象としており、会話の中に見られる言い直しは扱ってこなかった。

会話は参与者同士のインタラクションの影響を受けながら動的に構成されていくものであり、一人の話者がインタラクションの影響を受けずに発話し続ける独話とは、発話様式としての性質が大きく異なる。このことから、会話における言い直しをモデル化するためには、話し手と聞き手とのインタラクションについても考慮しなくてはならない。そのため、まずは会話の中にどのようなタイプの言い直しが出現するのかを検討する必要がある。

そこで本稿では、『日本語日常会話コーパス』（CEJC）に含まれる日常会話のデータを観察し、独話では見られなかった言い直しのタイプ、すなわち「インタラクションの影響を受けた言い直し」の例を収集、検討する。

2　先行研究

2.1　言い直しのモデル化

従来、言い直しの研究は、会話分析や心理学、音声言語処理などの分野で多く行われてきた [4, 5, 6, 7, 8, 9]。これに対し我々はコーパス言語学の立場から『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）に出現する言い直し表現をアノテーションし、その構造を捉えるためのモデルを提案してきた [1, 2, 3]。この中では独話における言い直し表現を形態的・機能的な観点から以下の 5 つに分類した。

R1：発話の失敗に伴う繰り返し　意図した語の発音に失敗してしまい、それを直ちに修復する

R2：単純な繰り返し　一度発話した語句をそのまま繰り返す

R3：語句の選択誤りに伴う訂正　話し手の意図とは異なる語句や表現を発話してしまい、それを直後に訂正する

R4：不適切な発話に伴う追加と繰り返し　一度発話した語句では不十分と気づき、情報を補足する表現を追加して、同じ語句を繰り返す

R5：不適切な発話に伴う言い換え　一度発話した語句を別の表現を使って言い換える

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).

本稿でもこれに倣い、言い直し表現を

{ **トラブル要素** | **編集表現** | **修復要素** }

のように三つ組みのモデルで捉える。アノテーションした独話における言い直しの実例を以下の図 1 に示す。編集表現が存在しない場合、|| のように | が連続する表記となる。

タイプ分けを {R1 (D しみゃし) | | しまし } た
急に {R2 出てって | | 出てって } しまったり
(F えー) {R3 黒い | (F あー) 失礼 | 青い } 丸は
(F あの) {R4 検査を | | その病院で 検査を } して
{R5 みんな | (F えー) | うちに遊びに来る友人達 } は

図 1　言い直しアノテーションの実例

2.2　会話の中のナラティブ

会話は、基本的に参与者間で順番交替を繰り返しながら発話を連鎖させていく活動であり、短時間のうちに話し手と聞き手が頻繁に交替することで話が進んでいく [10]。

一方、会話の途中で、ある話し手が比較的長時間にわたってターンを保持し、自らの経験や過去の出来事を一貫したストーリーとして語ることがある。ここではこれを「ナラティブ」と呼ぶことにする [11, 12]。ナラティブは言わば「一人語り」の状態であり、この時の聞き手は、「うん」「ええ」などの「応答系感動詞」や「へえ」「えっ」などの「感情表出系感動詞」など [13] を話し手の発話の間にあいづちとして挟むことで、ターンを保持している話し手の語りを促す。

実際の会話では、通常の会話部分とナラティブ部分が交互に現れることになるが、それらの境界を厳密に区分することは困難である [12]。後述するように、本稿では会話の転記テキストにおけるナラティブの部分を分析するが、会話部分とナラティブ部分を明確に区分する基準やその境界については論じない。本稿では便宜上「発話者が実質的内容を含む一連の語りを続けているのに対し、他の参与者が聞き手となり、応答系感動詞や感情表出系感動詞などのあいづちを発している範囲」をナラティブとして判断している。

3　分析対象データ

本稿では、分析対象データとして、国立国語研究所が開発した『日本語日常会話コーパス』（CEJC）[14] を利用する。CEJC にはさまざまな場面における自然な日常会話が 200 時間分収録されており、その映像、音声、転記テキスト、形態論情報などが利用できる。このうち、コアと呼ばれる約 20 時間分のデータ（約 25 万 3 千語）を観察し、会話における言い直し表現の事例を収集した。

4　会話における言い直し

CEJC のコアにあたる映像および転記テキストを観察し、言い直し表現と考えられる事例を収集してみたところ、大きく以下の二つに分かれることが分かった。

- 話し手自らの記憶のみで言い直す場合
- 聞き手の反応に影響を受け言い直す場合

前者は言い直しの過程に聞き手が介在していないことから、独話における言い直しと同じ構造であると考えられる。

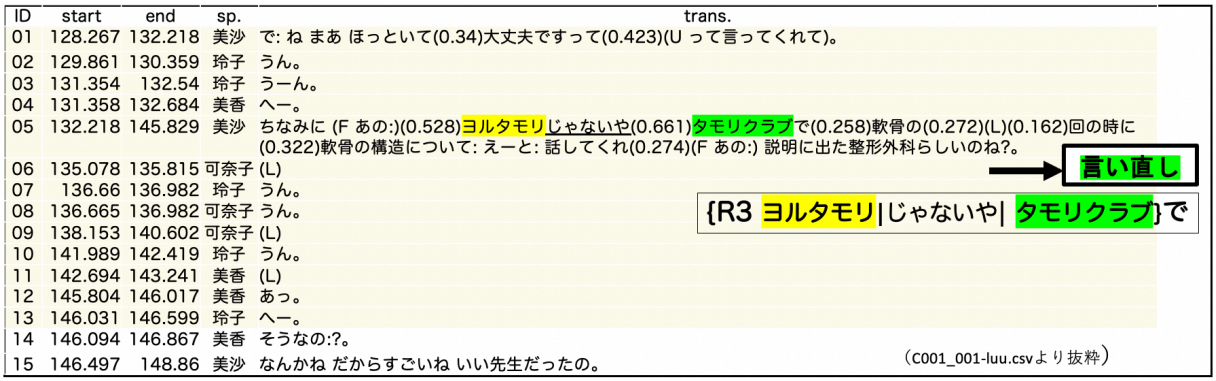
ところが会話においては、仮に話し手がナラティブを形成していても、発話中にトラブルが生じたことでその進行が中断され、聞き手とのインタラクションが生じる場合がある。話し手の言い直しに対する修復要素がそのインタラクションの中で聞き手からもたらされた場合、後者となる。以下ではそれぞれの例について考察を述べる。

4.1　話し手自らの記憶のみで言い直す場合

図 2 は、CEJC の転記テキストの一部である。各行は「発話単位」[15] を、2 列目以降の各列は、開始時間、終了時間、発話者名、発話をそれぞれ表す。この例において、01 以前の部分より始まり 05 へと連なる「美沙」の発話は、自らの経験を語るナラティブとなっている。聞き手は「うん」「へー」などの応答系/感情系感動詞のあいづちを発しながら、聞き役に徹していることが分かる。

このうち 05 の発話の中で、「ヨルタモリじゃないや (0.666) タモリクラブ」という言い直しが発生している。これはトラブル要素である「ヨルタモリ」が編集要素無しで修復要素「タモリクラブ」に置き換えられる例である。ここで着目すべきは、会話の中であっても、話し手が自分一人でトラブルを解決しているという点であり、このことから「話し手自らが判断して自らの発話内容を自らの記憶を元に言い直す」タイプであると言える。つまり、他の参与者による関与がないまま言い直しを開始し完了までしている点で、この事例は、2.1 で見た独話におけ

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).



ID	start	end	sp.	trans.
01	128.267	132.218	美沙	で: ね まあ ほっといて(0.34)大丈夫ですって(0.423)(U って言ってくれて)。
02	129.861	130.359	玲子	うん。
03	131.354	132.54	玲子	うーん。
04	131.358	132.684	美香	へー。
05	132.218	145.829	美沙	ちなみに (F あの:)(0.528)ヨルタモリじゃないや(0.661)タモリクラブで(0.258)軟骨の(0.272)(L)(0.162)回の時に (0.322)軟骨の構造について: えーと: 話してくれ(0.274)(F あの:) 説明に出た整形外科らしいのね?。
06	135.078	135.815	可奈子	(L)
07	136.66	136.982	玲子	うん。
08	136.665	136.982	可奈子	うん。
09	138.153	140.602	可奈子	(L)
10	141.989	142.419	玲子	うん。
11	142.694	143.241	美香	(L)
12	145.804	146.017	美香	あっ。
13	146.031	146.599	玲子	へー。
14	146.094	146.867	美香	そうなの:?。
15	146.497	148.86	美沙	なんかね だからすごいね いい先生だったの。

図 2　話し手自らの記憶のみで言い直す場合

る言い直しと同じ構造で捉えることができる。先の分類で言えば「R3：語句の選択誤りに伴う訂正」に該当する例であり、構造化すると、以下のように表せる。

{R3 ヨルタモリ | じゃないや | タモリクラブ } で

会話の中であっても、特にナラティブの中で話し手が自らの発言におけるトラブルを自ら解決している場合には、独話の言い直しと同じモデルを適用できると言える。

4.2　聞き手の反応に影響を受け言い直す場合

図 3 の例においても、01 以前から始まる「美沙」の発話がナラティブを構成しているが、図 2 と異なるのは、ナラティブの進行が 05 で中断し、聞き手とのインタラクションが始まるという点である。話し手（美沙）は、01 で自らが挙げた「治療師さん」が指す職業名を具体的に思い出せず、04 で「なんだっけ」という「自問発話」[16] を発している。さらにその直後に 06 で「整形外科の なんてゆうんだっけ」とさらに自問発話を発することにより自らの発話産出にトラブルが生じていることを聞き手に知らせている。ここの自問発話は、自らが逡巡していることを表すと同時に、周囲の聞き手に対して適切な表現を提案するよう働きかける発話としても機能する。

これに対して、08 で玲子が「柔道整復師みたいな?」と、10 で可奈子が「柔道整復師?」と反応し、さらにそれを受けた美沙も「(X ジューリョー)」と（不完全ながらも）繰り返しによって提案の受け入れと同意を示している。この時点でトラブルが解決できた美沙は、修復要素である「柔道整復師」に対し、文法的に整合性が取れるように後続する部分「とかも」を繋げ、ナラティブを再開している。言い直しにおいて、修復要素に対し文法的整合性が取れる語を選択し後続させることは、話し手の「聞き手に対する配慮 [17]」であり、ここでは美沙による聞き手への配慮が見られると言える。

ここで観察される流れを大局的に見ると、美沙による発話の中で

{R3 治療師さん | なんだっけ 整形外科の（略）人たち | 柔道整復師 } とかも

という言い直しが発生していることが分かる。ただし、修復要素の「柔道整復師」は話し手（美沙）が自ら解決したものではなく、聞き手とのインタラクションの結果として得られたものを共話 [18] のように流用している。実際、美沙は「(X ジューリョー)」と不完全な発話しかできておらず、「柔道整復師」と修復したのはむしろ聞き手の側であると言える。この点において、独話における言い直しの構造を単に当てはめるだけでは捉えきれないことが分かる。

さらに、図 4 のような例も観察された。図 4 では、01 で美沙が「スケボーで通ってたんだよ」と発話した後、聞き手との間で「会社に?。」「会社。」などの質問、応答を伴うインタラクションが発生している。ここで興味深いのは、12 で突如、美沙が自身の「スケボー」という語彙選択が誤っていたことに気づき、13 において「(F あの) これ」と発話しつつ当該の乗り物に乗る動作をして、自分が思い出せない乗り物の名前を周囲に尋ねている点である。その際、13 の発話において美沙に視線を向けられた可奈子が 14「キックボードみたいなやつ?。」と応答し、それをそのまま引き取る形で美沙が 15「キックボードで通ってて:」と発話していることが分かる。これは 01 と同じ構造を取る発話であり、01 の発話を訂正している例だと考えられる。

しかしながらこの場合、周囲に働きかけてその反応をもって自ら気づいた言い間違いを修正できて

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).

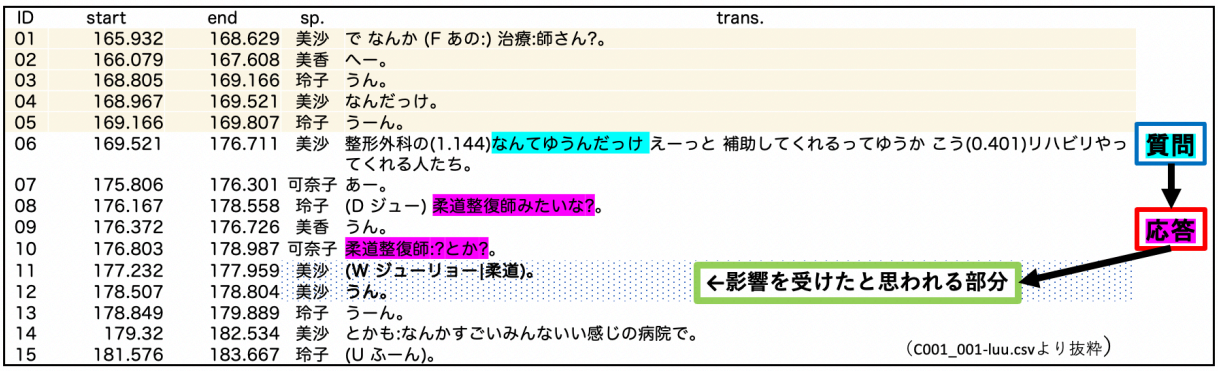


図 3　聞き手の反応に影響を受け言い直す場合

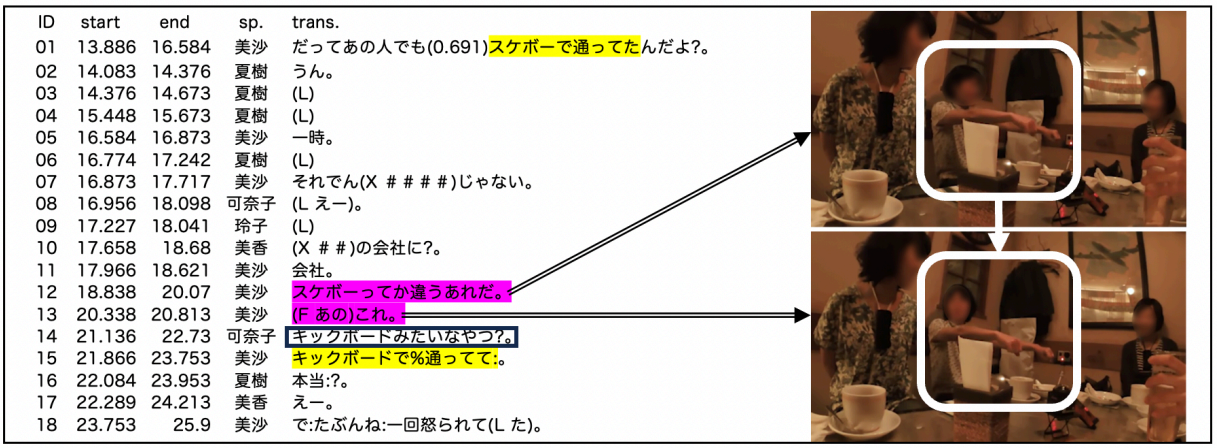


図 4　聞き手の反応に影響を受け言い直す場合 2

いるものの、トラブル要素（スケボー）と修復要素（キックボード）の間が離れており、三つ組みのモデルで表現するのが困難である。

このような「離れた位置にある言い直し」は、独話の中にも観察される。以下は、CSJ に見られる例である。

> 確か七分ですよね / 特別快速っていうのあんですけども / (F え) (F あっ) すいません / 特別快速じゃありませんね / (F えー) 快速特急ですね / で後特急っていうのがあります

この場合、「特別快速っていうのあんですけども」と発話した後、「特別快速」が「快速特急」の誤りであることに気付き訂正しているが、

{R3 特別快速 | じゃなくて | 快速特急 } っていうの

のような局所的な範囲で言い直し構造が生じているわけではない。言い直しを「発話中のトラブルを検知した話し手がその場で即座に対処する（言い直す）行為」と定義するのであれば、図 4 の例は言い直しには該当しない。「発話内容のトラブルに遅れて気づいた話し手が、聞き手とのインタラクションを通してトラブルを訂正した」現象であると言えるだろう。これを言い直しとして解釈するには議論が不十分である。このような例を言い直しとするのか、またする場合、言い直しの類型としてどのように記述するのかという点については、今後の課題としたい。

5　まとめと課題

本稿では、独話に現れる言い直し表現の定義を会話へ拡張することを目的として、CEJC を分析対象に会話における言い直し表現の同定と分析を行った。会話に見られる言い直しには、独話の構造をそのまま適用できる場合と、聞き手の反応に影響を受けて言い直す独話にはない構造をとる場合が存在した。

また、トラブル要素と修復要素の距離が離れているために、現在の言い直しの定義を当てはめられない事例も観察された。これを言い直しの類型とするか、また、類型とする場合はどのように記述するかについては今後の課題とする。

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).

謝辞

本研究は JSPS 科研費 20H05630 の助成を受けたものです。

参考文献

[1] 丸山岳彦. 『日本語話し言葉コーパス』に基づく言い直し表現の機能的分析. 日本語文法, Vol. 8, No. 2, pp. 121–139, 1999.

[2] 吉田奈央, 丸山岳彦. 日本語の言い直し表現に対するアノテーション基準. 言語処理学会 第 29 回年次大会 発表論文集, pp. 2274–2278, 2023.

[3] 吉田奈央, 丸山岳彦. 言い直し表現のアノテーション—その基準と方法論の検討—. 流暢性と非流暢性. ひつじ書房, 2024.

[4] Emanuel A Schegloff, Gail Jefferson, and Harvey Sacks. The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. **Language**, Vol. 53, No. 2, pp. 361–382, 1977.

[5] Willem. J. M. Levelt. Monitoring and self-repair in speech. **Cognition**, Vol. 14, pp. 41–104, 1983.

[6] Willem. J. M. Levelt. **Speaking: From intention to articulation**. MIT Press, 1989.

[7] Christine Nakatani and Julia Hirschberg. A speech-first model for repair identification and correction. In **Proceedings of 31th Annual Meeting of ACL**, pp. 200–207, 1993.

[8] H. Clark, Herbert. **Using language**. Cambridge University Press, 1996.

[9] 船越孝太郎, 徳永健伸, 田中穂積. 音声対話システムにおける日本語自己修復の処理. 自然言語処理, Vol. 10, No. 4, pp. 33–53, 2003.

[10] Harvey Sacks, Emanuel A Schegloff, and Gail Jefferson. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. **Language**, Vol. 50, No. 4, pp. 696–735, 1974.

[11] William Labov. **Language in the inner city: Studies in the Black English Vernacular**. University of Pennsylvania Press, 1972.

[12] 小玉安恵. ラボビアンモデルによる日本語のナラティブ分析の可能性と諸問題. 日本語国際センター紀要, Vol. 10, pp. 17–32, 2000.

[13] 吉田奈央, 高梨克也, 伝康晴. 対話におけるあいづち表現の認定とその問題点について. 言語処理学会 第 15 回年次大会 発表論文集, pp. 430–433, 2009.

[14] 小磯花絵, 臼田泰如, 川端良子. 『日本語日常会話コーパス』(corpus of everyday japanese conversation, cejc). 人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会, Vol. 96, p. 31, 2022.

[15] 丸山岳彦. 発話の単位. 講座 日本語コーパス 3 話し言葉コーパス 設計と構築, pp. 54–80. 朝倉書店, 2015.

[16] 丸山岳彦. 自問発話の形式と機能. ことばと文字, Vol. 14, pp. 13–22, 2021.

[17] 吉田奈央. 語句の選択誤りを伴う言い直し表現の細分化. 流暢性と非流暢性. ひつじ書房, 2024.

[18] 水谷信子. あいづち論. 日本語学, Vol. 12, No. 7, pp. 4–11, 1988.

This work is licensed by the author(s) under CC BY 4.0
(https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/).